

## 主のご降誕 おめでとうございます



### 主の降誕(夜半ミサ)の福音朗読

#### ルカによる福音 2:1-14

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおののおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

# いと高きところには栄光、神にあれ、 地には平和、御心に適う人にあれ

仙台教区司教 ガクタン エドガル

この歌詞を通して、私たちはクリスマスのミサで喜びを歌い、天使たちに加わっているかのように賛美を捧げて、平和を感謝したりします。しかし、ガザ、エルサレムとベツレヘムを含むガザ周辺の地方いわゆる聖地、ウクライナなど、紛争地となっている町や国に住む兄弟姉妹たちは、私たちとクリスマスの喜びを分かち合うことができないのです。紛争地に置かれている兄弟姉妹と共に、平和のために祈り続けましょう。

イエスがお生まれになった時、ベツレヘムは紛争地ではありませんでしたが、その時代には戦いもよく起こったし、暴力も日常茶飯事だったようです。マタイ福音書によれば、君臨していたヘロデ王は、ある子供が王になる預言を聞いた後、幼きイエスこそ王になる子だと恐れて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子、一人残らず殺させました（2:1-18）。イエスは危機一髪でした。

神も仏もない、そう思わせる暴力に満ちた人の世に、神は立ち入られる。馬小屋で生まれたイエスは、神の真の栄光と力である。戦争で荒廃した国で、平民の両親のもとに生まれた子によって、神は闇に答えてくださる。神は、ご自分の愛を示すために、この道を選び、苦しみに満ちた世界に足を踏み入れられる。

先日（11月16日）の多くの新聞の見出しが、世界保健機関事務局長がガザ地区シファ病院での軍事作戦を強く非難したことについてでした。「病院は戦場ではない」と検索してみたら、これについての記事が賛否両論の立場から何十も出てきます。

悲惨な暗いニュースが多い中、暗闇の中から一筋の光を放つ話を見つけ難いものです。検索を重ねた結果、紛争地に住む女性の声が聞こえました。それを紹介いたします。

「私たちは、主が栄光の復活によって世界を照らされたこの地で、イデオロギーの闇に疲れ果て、キリストがアブラハムの子らを一つにするために来られたこの地で、差別に疲れ果てています。私たちはまだ、マントを脱ぎ捨て、イエスのもとに駆け寄り、イエスの言葉を聞くことができるでしょうか。それができるのは、手を差し伸べて挨拶し、希望といのちの言葉をかけるとき。隣人のイスラム教徒と一緒にになって祈り、アッラーにこの大災害から私たちを救ってくださるよう懇願するとき。犠牲者の背景が何であれ、私の心が犠牲者のために涙するとき。ベールに恐怖を隠すのではなく、人類の醜い顔を拭うためにベールを使うとき。」

美談のように聞こえるかも知れませんが、この考えを持つ人は少ないのです。神は、押しつけによって私たちに友情を強要されるのではありません。イエスというお方において、神は私たちを内面から変えさせ、罪と分裂から私たちを癒し、私たちを導くために、弱い者になられました。神の思いは、小さな行動から始まるのです。どんな時にもキリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように行う人が二、三人いるのを感謝します。この人たちは、「神のみ心にかなう人」ではないかという気がします。天使たちの歌は「天には神の栄光があるように、地には、神の平和を実現する人がありますように」と聞こえできます。

## 世界新司教の研修会

仙台教区司教 ガクタン エドガル



に留学中の宣教国の司祭が滞在するコレジオ・サンパウロでした。

今年9月4日から13日まで、世界各地から最近叙階された司教たちがローマに集まり、「新司教のための研修会」が開かれ、参加してまいりました。この研修会は2000年に聖ヨハネ・パウロ二世によって始められました。

私は、長崎大司教の中村倫明大司教、大分教区の森山信三司教とともに、福音宣教省が開催するこの研修会に参加する機会に恵まれました。研修会のテーマは、「シノドスを生きる教会における司教の宣教の使命」というもので、会場はローマ

研修会には110人の司教が参加し、アフリカ諸国を中心に、アジア太平洋、中南米からも参加しました。他の宣教国の司教たちと出会い、ローマ教皇を構成するさまざまな省を紹介される機会となりました。

国務省、福音宣教省、教理省、典礼秘跡省、聖職者省、奉獻・使徒的生活会省、文化教育省、総合的人間開発省、法制省、広報省といったローマ教皇の長官または次官や、神学生養成、未成年者保護、危機管理などを専門とする司教や司祭から毎日話を聞くことができました。各講話の後、発表された内容から生じた質問をする機会がありました。特に、シノドス事務局長と会い、その進捗状況や背後にあるビジョンについて聞くことができたのは興味深いものでした。

私たちは、教皇フランシスコがモンゴル訪問から戻った3日後に会いました。教皇は、質問や発言を希望する司教に耳を傾けました。教皇はそれらに熱意とエネルギーをもって答えました。福音

と教会に対する熱意が強く、活力に満ちた人物を目の当たりにし、感動を覚えました。私たちはまた、教皇の夏宮殿カステル・ガンドルフォで黙想のために一日を過ごす機会もありました。

この同じ期間、別の会場で、111人の司教が参加した司教省による開催の研修会が行われました。この司教たちは北米とヨーロッパからで、いわゆる宣教地以外の教会の司教たちで、彼らと晩の祈りで始まった交流会がありました。

他の司教たちと一緒にいる時間は、私たち全員が経験していることについて話すのに役立つと思いました。共に祈り、考える機会はとても実り多かったです。

この研修会は、教会が私たちの教区だけでなく、もっと大きな存在であること、私たちが共通の課題に直面していること、そして同時に、私たちの信仰を深め、互いに学び合う素晴らしい機会があることを気づかせてくれました。この学びを行動に移せることを願っています。

## 韓国光州教区から2人の大司教様 来仙

日本と韓国の司教団は、1996年から日本と韓国で交互に交流会を開き友好関係を深めてまいりました。今年の日韓司教交流会は東京で11月13日(月)から16日(木)まで行われましたが、その後11月16日(木)から19日(日)まで、光州大司教区の2人の大司教様が仙台をご訪問くださいました。この初来仙の喜びをお伝えいたします。

11月16日(木)は夕方4時に新幹線で仙台駅にお着きになり、歓迎の夕食会が開かれ、光州教区と仙台教区の交流を祝いました。

仙台に到着された翌17日、朝9時から、元寺小路小聖堂で、韓国語でミサがささげられました。その後、2階会議室を茶室にしつらえ、大司教様方にお茶のお振舞がなされました。お茶をたててくださったのは、元寺小路教会の信徒の門脇照子先生、閔緋紗子さんと篠原るり子さんが、お手伝いくださいり、おいしいお茶を召し上がっていただきました。その間、茶道の創始者・千利休のお茶



に力トリックのミサの所作が影響を与えていているという興味深い話も披露されました。

その後、午前中は司教様方の懇談会が行われ、その中で、仙台教区と光州大司教区間の交流、交わりの活性化について話されました。今後の司祭派遣や信者間の交流についても話され、行事以外のさまざまな方面で議論が必要という認識も示されました。特に、2027年の世界青年大会WYDが韓国で開催されることを機会に、多くの青年が仙台教区から参加するよう希望されました。

午後には、石巻地域を訪問しました。2011年の東日本大震災のとき、韓国の司教団が訪問して



くださった際、現光州大司教区長である大司教様もそのとき、仙台教区に訪れ、日和山から当時の被害の状況をご覧になっていました。大司教様は、当時の現場を思い出し、これまで多くの人が頑張つて来たことを励まし、お祈りをささげました。その後、石巻教会を訪問し、担当司祭と数人の信者との分かち合いもできました。



翌18日は、仙台の韓人共同体の人々と共に、米川教会を訪問し、ミサをささげました。この地方は、東北地方の殉教者の聖地と言われています。日本も韓国も、迫害の歴史を持っていますが、殉教者たちの信仰の証しがなかつたら、今日のような教会は存在しなかつたかもしれませんと大司教様



はおしゃり、殉教者たちの信仰の模範を学びましょうと導かれました。特に、お祈りについての説教を通して、皆が、どこにいても同じ信仰を持っているかぎり、一つであると強調されました。長い分かち合いの時間を通じて、韓人共同体の信者たちにも良い時間になったと考えております。大司教様はこれからも韓国教会からの協力と応援を約束してくださいました。 李錫

## 韓国光州大司教区 お二人の大司教様と ともにささげるミサ

年間第33主日  
11月19日(日) 9:30~  
元寺小路教会



ミサは、仙台教区カテドラル元寺小路教会が満員の参列者の中、侍者、聖体奉仕者に続き、李錫神父様、イグナシオ神父様、続いてお二人の光州(クアンジュ)大司教区のチエ・チャンム アンドレア名誉大司教様、とオク・ヒョンジン シモン大司教様、平賀徹夫名誉司教様、ガクタン エドガル司教様が入堂され、ミサが始まりました。

会衆席には、前列の4番目までは、韓国の信者の方々の席が確保されていました。美しいチマ・チョゴリをお召しになった方々の姿も目を引きました。

第一朗読の箴言31:10-:13,:19-:20,:30-:31はチマ・チョゴリを着た韓国の信者が韓国語で朗読し、第二朗読1テサロニケ5:1-6は日本語の朗読でした。福音は、タラントンの長いマタイ25:14-:30をイグナシオ神父が朗読し、ガクタン司教の説教に移りました。

### ガクタン司教様の説教の要約

日韓司教交流会は、1996年から始まりました。3人の韓国の司教様と2人の日本の司教様が、日韓教科書問題を話し合うことから始まりました。この交流会は、日本と韓国で交互に開かれています。コロナ禍で2020年から開催できなかったのですが、今年25周年を迎えました。

重ねた交流の実りは友情、交わりです。そのさらなる具体化として、日本の教区に50人の司祭を韓国各教区から派遣してくださっています。5年前から仙台教区にも李錫神父様を光州大司教区が送ってくださっています。

今日(19日)から26日まで、聖書週間を過ごしていますが、今年の聖書週間リーフレット「聖書に親しむ」の巻頭言は、私が書いた「愛の恵み」です。この巻頭言に取り上げた放蕩息子の話と今日の福音箇所のメッセージとが重なっているような気がします。

まず、第1朗読「箴言」に描かれる女性ですが、このような人と結婚した人は何という幸いなことでしょう、と言っています。しかし、私たちの周りのあちこちに、このような奥様がいらっしゃいますね。日常生活をひっそりと過ごしておられます。

教会は、花嫁とたとえられます。ですからこの聖書の箇所は、教会共同体について書かれているのだと思って読むとよいでしょう。20節は、私たちの共同体に求められていることです。「貧しい人には手を開き、乏しい人に手を伸べる。」私たちの共同体が、このようであれば、社会に対して無関心ではありません。困っている人々に手を差し伸べるでしょう。考えさせられる言葉です。

ある人は、教会をこのようにたとえています。「教会は灯台です」と。このような教会は、門も扉も開かなければ、人は来ません。

交流は小さな事から始まります。小教区の交わりは、ミサの前後から始まります。例えば、挨拶の言葉がかけられるだけで、この人は私に関心を持ってくれているな、と分かります。平和への小さな行動でも、一人、二人から始まるのです。

今日の福音箇所で、タラントンという言葉が出てきました。これは、当時の人の20年分の給料だと言われています。1タラントンは莫大なお金です。計り知れない神の愛、いつくしみをあらわしています。

主人が3人の僕にそれぞれの力に応じて、5タラントン、2タラントン、1タラントンを預けて旅に出かけました。5タラントン預かった者はほかに5タラントンをもうけ、2タラントン預かった者も、ほかに2タラントンをもうけました。しかし、3人目の者は、主人に1タラントンをそのまま返しました。

私が「聖書に親しむ」に取り上げた放蕩息子は、このようなお金を使い果たしてしまいました。放蕩息子の話には、結末が書かれていません。もしかするとイエスは私たちに物語を終わらせるのを望んでおられるかも知れません。私は神の贖いと赦しの物語をこのように続けます。息子が言ったように、「雇人の一人にしてください」という願いをかなえ、息子の願い通りにお父さんがすると、息子は勤勉に働いて、労働し、きっと生活を立て直したことでしょう。彼は、神のいつくしみを味わっていくのです。私は、弟が兄とその家族を家に迎え、亡き父親を偲びながら食事を共にした、とまで物語の結末を想像しています。放蕩息子のお父さんは莫大なお金を失いましたが、帰ってきたのは元金よりはるかに価値の高いものです。回心した息子です。

父と息子と・兄と弟との和解、隣同士の司教の交流、他文化の共同体の交わり、誰かとの仲直り、紛争地で敵同士と思われる被災者の助け合い。これらは、神のいつくしみのいわば収益だと思っています。神に感謝。

奉獻の祈りの時には、ガクタン司教を中心にお二人の韓國の大司教様の祈りも加わりました。

奉納行列には、再び美しいチマ・チョゴリ姿の人も交え、パンとぶどう酒と献金がささげられました。



オク・ヒョンジン  
シモン大司教様

聖体拝領の後の祝福のあと、お二人の司教様に元寺小路教会の代表者から全員の拍手と共にプレゼントが送られました。仙台名産の立派な塗り物のはがき入れだとのことです。オク・ヒョンジン・シモン大司教様から、感謝の言葉が述べられました。「こんにちは」と日本語で挨拶され、その後、簡単な言葉でご挨拶したいと思います、と言われたのですが、そのお言葉は「野原の詩」という詩のようで、訳者は、困りながら次のように訳してくださいました。

「よく見ると美しい。

長く見つめていたら、愛らしい。

あなたもそうだ。」

「これから、光州教区と仙台教区は長く見つめることで、美しさを見たい」とおっしゃり最後にまた日本語で「ありがとう」と言われ、大きな拍手を受けました。

これに応え、ガクタン司教も感謝の言葉を力強く述べました。

「シモン大司教様、アンドレア元大司教様、本当にありがとうございました。本当は3人の大司教様が来てくださるはずだったのですが、急用でキム・ヒジョング ヒジヌス前大司教が帰国なさったのです。残念でした。平賀司教様がローマと一緒に学んでおられた前大司教様にお願いして、仙台教区に李神父様を送ってくださったのです。シモン大司教様がおっしゃったように、仙台教区と光州大司教区の関係が長く続きますようにと祈っています。神に感謝！」。

残念ながら、ミサ後、二人の大司教様たちはすぐに空港に向かわなければならず、お別れとなりました。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

# 多文化を感謝

今年の「世界難民移住移動者の日」は、第109回に当たります。

今回のテーマは「移住かとどまるかを選択する自由」というテーマです。

この日、仙台教区カトリック元寺小路教会では、インターナショナルミサが、  
ガクタン エドガル司教の主式でささげられ、司教は日本語と英語で説教をしました。

(インターナショナルミサの関連記事は 13 ページ)

第一朗読 イザヤ書 55:6 - 9、

第二朗読 フィリピの信徒への手紙 1:20c - 24,27a、

福音朗読 マタイによる福音書 20:1 - 16

## 仙台教区司教 ガクタン エドガル

みことばの朗読に対して、私たちは「神に感謝」と言いました。また、派遣の言葉に対しても「神に感謝」と言います。

福音を聞くと、「主に賛美」と答えます。今日も、私たちはその言葉で神の寛大さ、神の心の良さ、気前のよさに感謝を表したのです。

9月になると、ブドウがよく取れる季節です。この聖書の箇所が読まれるのにふさわしい時期です。よい収穫の時期です。ブドウ園の主人は、ブドウが熟すのを待っています。遅くなると雨が降ってきます。そうすると、実が落ちてしまうからです。

いつ収穫するのに適した時期かどうか、見極める目が必要です。

当時の日雇いの労働時間は12時間でした。朝6時から夕方6時まで。主人は、朝6時から働いてもらえるように、5時くらいから人を見つけに行くのです。体が丈夫そうで、力がありそうな人、背が高い人、こういう人々だったら、1日で、大丈夫だろうと思いました。しかし、9時頃になっても、自分の思うようにはかどっていない。それで、次に同じ広場に行き、頑丈そうな人から声をかけます。「わたしのブドウ畠に行って働きなさい」という。しかし、まだ、終わりそうにないと主人は、また、ブドウ園で働く人を見つけに行きます。12時、3時にまた雇いにいきました。

5時になっても、人を探しにでかけました。雇われなかつた人が待っていました。それでも彼らは、時給だけでも、その夜の食事のためにもらえたたらという思いで待っている。彼らはなまけものですか？ そうではないのです。彼らは、『だれも雇ってくれない』からです。

仕事の終わりの時間になって、最後の人からお金をもらいました。1デナリオンをもらいました。次の人も同じ給料をもらいました。最初の人の番が来たとき、私は12時間働いたのだから、1デナリオン以上もらえるだろうと思っていたのです。当然文句を言いました。不公平だ、不平等だ！

猿も同じだそうです。猿に対する実験を聞いたことがあります。何かをさせて、できた猿に御褒美としてキュウリをあげました。他の猿も同じことをさせて、できました。しかし、キュウリではなく、ブドウをもらいました。キュウリをもらった猿は不満そうなかおをしたそうです。

猿も人間も、自分の正義感を持って不平等だ、と言います。でも第一朗読にあるように、神の正義はちがっているのです。「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。」

私たちは、同じブドウ園に雇われています。「いらっしゃい」と言われた人たちは皆、神様の目に皆価値のある人たちです。私たちは、業績主義という考え方をいたします。かつて、「負け犬」という言葉がありました。しかし、神にはその真反対の考え方があります。神はすべての人を招いていらっしゃるのです。これこそ、神の寛大さ、神のいつくしみです。

イエス・キリストは言葉と行いを通して疎外された人たちを招かれるのです。

私たちも神のブドウ園に招かれている者です。今日、イエスは例え話を通して私たちに、神のいつくしみを教え、そのいつくしみを受けた者が、周りの人に同じ恵みを示す者となるように願っているのです。

## ■特別寄稿■

### 〈仙台・広瀬川殉教400年記念祭を祝う〉 殉教者が多い仙台教区、約1000人!



高橋 昌 神父  
(仙台教区 協力司祭)

仙台教区には、約千人の殉教者がいる。宮城県の仙台で96人、登米市東和町米川で120人、青森県の弘前で88人、岩手県との盛岡と花巻と遠野で140人、水沢で98人、一関で14人、一関藤沢町大籠で310人—ここには殉教公園がある—福島県の会津若松で62人、白河で16人、二本松で14人、猪苗代で多数(人数不明)、以上合計で約千人。びっくりするほど殉教者が多い。一人一人の殉教者が命を懸けてまで守ったものは、何であったのか?……

その殉教の意味を、前前仙台教区長の溝部脩司教は『メッセージ—殉教者からの現代の教会へ—』(サンパウロ刊)の中で「キリスト時代は『本当の幸せは、この時代を生き抜いて、永遠のいのちを神様のもとで生きる』ということを信念としていた。」と書いている。



仙台市広瀬川河畔に建っている「仙台キリスト殉教碑」カルヴァーリヨ神父は武士と農民の間に立っている

さて、広瀬川の殉教の様子を述べる。400年ほど前、1624年(元和10・寛永元年)、伊達藩のキリスト教弾圧が強くなり、岩手県水沢の見分(みわけ)の領主・後藤寿庵の領地に及んだ。同年2月9日、雪中の足跡から60人ほどの信徒の世話をしていたディエゴ・カルヴァーリヨ神父の周辺にもおよび、神父と信徒が捕らえられた。水沢の奉行所へ行く途中、老齢で歩けなくなった2人は斬首された。

取り調べで棄教しない神父と7人の信徒は、32里(約130キロ)離れた仙台へ送られた。神父は馬で、信徒は徒歩で。そのうちの3人は足枷をはめられ、骨は曲がり、脱臼したのに屈せず、苦しい様子を見せずに歩いた。途中、1人が加わり、一行9人が仙台へ着いた。

2月18日(陰暦の大晦日)午後2時、真冬の広瀬川原に連行され、水牢(氷責め)に入れられた。3時間後、引き上げられたが、2人が絶命した。残りの7人は4日後の22日(正月4日)、再び水牢(氷責め)の刑を受け、「ゼスス・マリア」「いつもたつときサクラメント(ご聖体)は尊ばれ給え」と唱え続けた。

一人また一人と息絶えていき、最後に信徒たちを励まし続けたカルヴァーリヨ神父が息を引き取った。氷責めが始まってから10時間経っていた。

なおディエゴ・カルヴァーリヨ神父は、1867年に「日本205福者」の一人として列福された。



ご絵に描かれた  
カルヴァーリヨ  
神父の肖像画

○来年の2月23日(金・天皇誕生日)の午後1時から、仙台カテドラル元寺小路教会で「仙台キリスト殉教祭」広瀬川殉教400年記念ミサを行う。その後、記念式典も執り行われる予定。皆さまの参加をお待ちしております。

#### 【お知らせ】

広瀬川殉教400年を記念するに当たり、イエズス会と仙台教区は、以下のことを決定いたしました。  
**福者ディエゴ・カルヴァーリヨ**の名前をこのように統一し、表記することに決定いたしました。今後、この表記をお使いいただければ幸いです。

## こんにちは カリタスみちのくです



「カリタスみちのくってなんだ?」と思われる方も多いことでしょう。東日本大震災復興支援のために開設された「仙台教区サポートセンター」が2021年3月に活動を終了するにあたり、その後も活動を続けていくカリタスベースや小教区、活動グループ、大勢のボランティアさん、全国の皆さんとのつながりを続けていこうと、有志メンバーが立ち上げたネットワークです。被災地の今の姿やこれまでの経験、支援活動の情報を発信すること。被災地とボランティア、活動をしている人同士をつなぐこと。東日本大震災に限らず、さまざまな地域の課題に取り組んでいる方々や、「これから、何か自分にできることがないか」と思っている方との新たなつながりも広げていくことを目標に、試行錯誤しながら活動しています。

9月30日（土）、福島県のカリタス南相馬とカトリック原町教会を会場に、「カリタスみちのくの集い」を開催しました。復興の途上にある相双地方の現状を、自分の目で見て現状を知る第1部と、シノドスに連帯してテゼの祈りを行う第2部という構成でした。岩手、宮城、福島、



そして関東からも参加者が集まり、新たなつながりを作ることができました。コロナ禍に立ち上った「みちのく」にとって、初めての完全対面式の集いとなりました。

カリタスみちのくでは、毎月11日に各地での活動の様子を配信しています。メーリングリスト登録希望の方は [cmichinoku@gmail.com](mailto:cmichinoku@gmail.com) へご連絡ください。また、ホームページでは詳しい情報やこれまでに発行したおたよりなどをご覧いただけます。ぜひインターネットで「カリタスみちのく」を検索してみてください。

カリタスみちのく 世話人 濱山 麻子

# 仙台教区のうごき

## 【司祭評議会報告】

司祭評議会のメンバーは、ガクタン エドガル司教を中心に、幸田和生司教、小野寺洋一師、イグナシオ・マルティネス師、李錫師、パトリック・カストロベルデ師、俞鍾弼師、マルコ・アントニオ師、佐藤修師、メヒア ラファエル師、會津隆司師が集まり、毎月開催されている。

毎月、各地区長の司祭から、1月間の主な活動が報告されている。各地区とも、司祭を中心に、夏はサマーキャンプを行ったこと、どの地区も宣教司牧評議会の定例会に地区代表の信徒2人を選出し、問い合わせられている課題にどのように答えていくかを真剣に考えている。また、合同堅信式や黙想会を開いているという報告もあり、活発に教会活動をしている姿が伺えて頗もしい。さらに、来年の広瀬川殉教者の400年にあたり、準備をしている地区もある。

議題としては、どの地区も抱えている移住移動者の司牧課題への対応については、ギャリーゲストベオ師、クレアさん、シスター・マイなどの協力を得て、前向きに進められている。

そういう関係で、札幌教区、新潟教区、仙台教区が協力して、ベトナム語による結婚講座と入門講座がリモートで開設されることになった。これは、ベトナムの教会が認めているもので、日本でその講座を受けることで、ベトナムの教

会でも有効である。結婚講座は3か月、入門講座は1年で、仙台教区の窓口はシスター・マイである。

来年4月に開催されるアド・リミナのために、日本の教会は8年間の報告をバチカンに提出しなければならず、仙台教区では、その準備をすませ、すでに提出することができた。アド・リミナは通常、5年ごとであるが、今回はコロナのパンデミックの影響で、8年間になったもの。出された資料の中から、徐々に司祭団にも報告される運びとなっている。すでに、カリタスの活動と広報委員会については報告が終わっている。

教会の建物の老朽化に伴い、あちこちの教会で、修理が必要とされていることが報告されている。その中で、郡山教会は、司祭と信徒が力を合わせて、信徒館と司祭館を合わせて、新たに建築し直そうとし、プロポーザル方式で実現しようとしている。

しかし、何といっても、世界教会の歩みであるシノダリティに合わせ、仙台教区も司祭の集い、司祭の月例会などで、その歩調に合わせて進んで行こうとしていることが、特徴と言えるであろう。

仙台教区事務局 事務局長  
イグナシオ・マルティネス

## 【宣教司牧評議会報告】

### 2023年度 宣教司牧評議会定例会

2023年度の仙台教区宣教司牧評議会定例会が、秋分の日の9月23日、仙台カテドラルと1階会議室を使い、開催された。出席者は、教区本部からガクタン エドガル司教、小野寺洋一司教総代理、イグナシオ・マルティネス教区事務局長が出席し、講師としてシノドスチームの幸田和生司教、司祭を代表して、第1地区から第5地区までの各地区長が参加した。各地区長の名前は以下の通りである。

第1地区：李錫師、第2地区：マルコ・アントニオ師、第3地区：ラファエル・メヒア師、第4地区：俞鍾弼師、第5地区：佐藤修師である。

各地区連絡会の信徒代表としては、以下の方々が参加した。第1地区・鈴木嘉昭氏、堀憲一氏。



第2地区・真山重博氏、飯塚豊氏。第3地区・菅原圭一氏、大野隆氏、第4地区・佐々木由美氏、原尚幸氏、第5地区・小湊博子氏、芳賀光氏。

司教直任として、仙台教区移住者司牧担当のギャリー・ゲストベオ師、オリーブの会の野田和雄氏、カリタスみちのくの世話人の濱山麻子氏、日本カトリック婦人団体連盟会長の阿倍正子氏、仙台カトリック医師会の上西博氏が参加。合計24人の参加者によって、午前10時から午

後5時まで、カテドラル大聖堂で、祈りから始まるみことばを囲む共同体として、この歩みを神様に委ね、祈りの雰囲気の内に討議が繰り広げられた。

年に1度の定例会の前には、司教による7月に各地区において地区連絡会を開き、代表者を選出し、その人々が、各地区的意見を集め、発表するために、以下の2つの質問を出していた。

司教団は、司祭たちのさまざまな集まりを通して、仙台教区の歩みを振り返り、どのように交わりを生き、参加を実現し、宣教を行っているかを分かち合っている。このような分かち合いを小教区、ブロック、地区に広げていくために、宣教司牧評議会定例会の準備として、次のテーマで話し合っていただきたい、という課題が出された。

1. 新地区・ブロックが始まって、どのようなチャレンジに直面しているでしょうか。  
⇒信徒同士・周りの人との交わりの面においてのチャレンジ（課題）  
⇒小教区の生活の参加の面においてのチャレンジ（課題）
2. 地域での個人あるいは共同体としての福音宣教活動に伴うチャレンジは何でしょうか。  
この質問を代表者たちは、答えをまとめて参加することが求められていた。

午前10時から、「共に歩み、聞き、交わるために」のテーマで、李神父の司会でみことばの祭儀が行われた後、会議室に移動して会議が始められた。司教の挨拶の後、今年7月23日に施行された「宣教司牧評議会」の規則が紹介された。



11時から、幸田司教による講話『世界のシノドス、わたしたちのシノドス』が話された。2021年から教会は、シノドスの歩みをしている。この流れに並行して、私たちは、定例会に参加するように招かれ、「交わり、参加、そして宣教」へというチャレンジに直面し、これまで各地区で歩みを進めながらこの場にいる。宣教司牧評議会は、教会の活動全体を宣教司牧ととらえている。



昼食の時、この日がちょうど、ガクタン司教の誕生日に当たったため、司教にケーキが出され、ケーキカットをするというサプライズの一コマがあった。

午後からは、各地区代表出席者から各地区10分で、説明を行った。その後、質疑応答があり、直任者から、それぞれの立場からその活動の紹介がなされた後、質疑応答がなされた。

午後4時から、幸田司教と李神父によるコメントが発表された。

○地区代表の人々は、司教の「招きのことば」に書かれていた質問によく答えている。これは、シノドスの第一段階である「できるだけ多くの声を聴き、集める」ということに相当している。今度は、これを各地区に持ち帰って、伝えなければならない。これが、送り出してくださった人々への務めであり、これがシノドスの精神である。

参加することによって、課題がたくさん出されたが、それに応え「識別する」ことは、シノドスの第2の段階である。これは、聖霊の中での対話をすることである。

最後に、ガクタン司教による感謝の言葉と挨拶、そして、全員が派遣の祝福を受けて各地区に帰っていった。祈りで始まり、祈りで終わつた「共に歩む教会」の体験であった。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

# 各地区からのお便り

## 第1地区より

### わたしたちのシノドス 第1地区連絡協議会

9月9日(土)秋晴れの本町教会において、第1地区連絡協議会が開催されました。

わたしたちの第1地区（青森県全域と岩手県の久慈教会）のすべての小教区から司祭、信徒、修道会の皆様が一堂に会し、司祭団司式による感謝の祭儀、ガクタン エドガル司教様からの招きに応えたシノドスの取り組みを分かち合うことを通して、あらためて出会い、気付き合い、学び合い、喜び合い、勇気と力をいただきました。



9月23日(土)の仙台司教区宣教司牧評議会の実りを受けて、今わたしたちは各小教区において、おおのシノドスの歩みをさらに少しづつ進めております。これからも聖霊の導きに従い、教会本来の愛と光を体験し、その輪を広げ、深めて、一歩一歩共に歩むことができますように恵みを祈っております。

松田 大（浪打教会）

### 〈三ハブロック〉

### 楽しかった！暑かった！サマーキャンプ

8月11日(金)(山の日)に、『心と思いをひとつに』をテーマにした「三ハブロックサマーキャンプ」が八戸塩町教会とイ梅爾ダ幼稚園の園庭を会場にして開催されました。

3年間コロナ禍でイベントの開催が出来なかつた中で今回の開催になり、久しぶりのイベ

ントということもあり、小1～高2の19人という多くの子どもたちが参加してくれました。



午前10時の開始時間になり、オリエンテーションでは最初にリラックスするために早口言葉を大きな声で言って、緊張をほぐし、聖歌を歌い、お祈りをしてキャンプが始まりました。最初に行われたのは「SDGs すごろく」で、みんななかなか上がれず苦戦して、その後「クイズ」を楽しんでパトリック神父様が9人兄弟だとわかったり、グループに分かれてパトリック神父様とアンリ神父様と、Sr.小川とのお話で神父様の叙階までのお話を聞いたりしました。

お待ちかねの「スイカ割り」で楽しみ、スイカなどでおやつタイム、自由時間の後はアンリ神父様の母国のコンゴ民主共和国のミサの様子のビデオをアンリ神父様の解説で鑑賞しました。ところ変わればミサの様子も日本のミサとは全然違う、ミサの中で踊りがあつたりしてなんとも躍動感のあるミサという印象でした。夕食の後は、「平和旬間」に当たって、Sr.小川と八戸塩町教会の福島さんから太平洋戦争に関するこ話を聞いていただきました。

太陽も傾き、キャンプの最後のお楽しみの花火タイムになり、イ梅爾ダ幼稚園の園庭でみんなで楽しく花火をして、午後8時、お聖堂に集まって歌とお祈りののち終了しました。

自由時間には園庭でサッカーをするツワモノがいて、暑さも何のそのでしたが、気温は35℃を超えていたので、麦茶でしおりゅう水分補給をしていました。

聖歌を歌ったり、食前のお祈りも聖歌「神様といつもいっしょ」を歌いました。

神様がお守りくださり、1人のけが人や病人(特に熱中症)も出さずにキャンプを終わらせることができました。

神に感謝。 牧山 智廣(八戸塩町教会)  
(教会便り8月号より)

## 〈三八ブロック〉合同堅信式

八戸もようやく涼しくなってきた季節の変わり目の10月22日(日)、第1地区三八ブロックとしての初めての合同堅信式が八戸塩町教会で行われました。主司式のガクタン エドガル司教様をお迎えし、そして日頃から三八ブロックを担当している司祭団の板垣神父様、アンリ神父様、パトリック神父様が司式に加わり、堅信式とごミサが盛大に執り行われました。



受堅者は塩町教会の11人、久慈教会の5人、三沢教会の3人、鮫教会の2人の21人に及びました。それぞれさまざまな年代と個性を持つ信徒の方々が、教会の正式な構成員となり、それぞれが派遣される日常の生活の中で、キリストの香りを放ち信仰を証していくこととなります。

合同堅信式では、およそ二百数十人の信徒で会衆席は玄関ホールまでいっぱいになりました。集まつたのは、さまざまな背景を持つ大変多様な信徒たちの群れです。聖堂はわいわいがやがやといろんな言語であふれ、典礼もさまざまな言語で獻げられました。栄光の讃歌は”Papuri Sa Diyos”が日本語とタガログ語で歌われ、第1朗読は英語、奉納ではベトナム語の聖歌も歌われました。また、共同祈願は受堅者代表の2人が日本語で祈り、さらに参列者によって英語、フランス語、タガログ語、ベトナム語、インドネシア語で祈られました。普段は各国語ごとの典礼に分断されているカトリック教会が、ペンテコステの出来事のように、一つになっていく未来を見ているようでした。



ガクタン司教様は説教の中で、年間第29主日の福音書朗読(マタイ22章15-21節)のいわゆる「納稅問答」に基づいて、私たち一人一人が神さまの刻印がおされている人間であることを強調されました。ローマ帝国時代のコインに

は皇帝の肖像と銘が刻印されていました。しかし創世記1章にあるように、私たち人間は神に似せて、かたどられて造られています。皇帝のコインは皇帝に返し、神のものである私たちは神さまにかえっていくのです。

そして、堅信式では塗油のしるしによって消えない靈印が刻されます。洗礼によって新たにされた兄弟姉妹が油を注がれるというこの出来事は、多様な使命を持つ一人一人を一つの信仰に招きます。旧約の時代、主と呼ばれた神は目に見えませんでしたが、イエスは見えました。しかし今は、もう目に見えないイエス・キリストに代わって、聖靈が送られています。この聖靈の力によって、私たちは神さまのことを主ではなく、父と呼びます(ローマ8:15, ガラ4:6)。この聖靈のしるしである油を受けて、「キリストに似た者となり、靈の火を広げること、キリストの香り、ちがいを感じさせる人となるよう努めるように」と、ガクタン司教様は力強く述べられました。



合同堅信式の後は、出席者全員の集合写真を撮影しました。風の強い一日でしたが束の間の暖かい晴れ間にも恵まれて、イ梅ルダ幼稚園の園庭に出て、三八ブロックの各教会の紹介かねがね、交流会と軽食をみんなで楽しみました。ご準備くださった皆様に御礼を申し上げます。また、八戸塩町教会有志によるバイオリンアンサンブルの前奏奉仕をはじめ、ガクタン司教様と司祭団の神父様方、当日合同堅信式を支えてくださった多くの皆様、準備にあたった三八ブロックの皆様に感謝を申し上げます。

多くの人々とともに、21人の受堅者を祝福できたことを心からうれしく思います。イエス・キリストの弟子たちが一つとなってさまざまな言語で多くの人々に信仰を証ししたペンテコステの出来事ながら、やがて三八ブロックの各教会が一つの共同体となり、さらには各国語のへだてもない未来の仙台司教区、一つの日本のカトリック教会という可能性を感じた合同堅信式の一日本となりました。

石原 良明 (八戸塩町教会)

## 第2地区より

### 地区大会に参加して

10月8日(日)午前10時から、盛岡市内の四ヶ家教会において、地区制度が始まってから第3回、第2地区になってからは初めての地区大会が開催されました。午前中、テーマ『シノドスについて』に従いガクタン エドガル司教様の講話を頂き、昼食後ガクタン司教様と第2地区を担当して下さっているマルコ・アントニオ神父、ポール・トーレ神父、堀江節朗神父、塩田希神父様の共同司式でミサ聖祭および信徒5人の合同堅信式が行われました。地区全体で約140人が参加をし、ミサ後はベトナムの若者が堅信を受けた5人を歌と踊りでお祝いをしてくれるといううれしい1日でした。



『SYNODUS=syn 共に + hodos 道=共に歩むこと』については今まで、そしてこれからも神父様方からもお話をいただき、我々信徒も考えていくことだと思いますが、司教様の講話を伺いながら私は一つのことがずっと脳裏から離れずにいました。共に歩んでいない(今はあえてこう言います)のは何が一番の原因なのだろう? それと同時に今年還暦を迎える当方が小学生の時に日曜学校のキャンプで青年部の大学生が話してくれた“教会は良いところだよ。田中総理も長嶋茂雄も僕らも教会の中ではみな一緒に歩むこと”という言葉。堅信式に参加しながら自分が堅信の勉強会で勉強した聖霊の賜物という言葉を思い出し、この大学生の言葉をリフレイン(繰返)していました。今、教区内も環境の変化とそれに伴う諸般の事情から各教会で集会祭儀が行われています。今から200年もさかのぼれば司祭職は表向きは一人もいない中で信徒は常に集会祭儀たるものを行っていたのでしょうか。我々信徒の基本的な分かち合い。この辺も共に歩みを深める切り口の一つかなと思っています。

赤星 克哉 (四ヶ家教会)

## 第4地区より

### 〈カテドラルブロック/元寺小路教会〉 インターナショナルミサ・交流会開催

今年の世界難民移住移動者の日に向けた、教皇メッセージ「移住かとどまるかを選択する自由」で、自国を離れるという決断をなす際、そこに明確になければならない自由について取り上げられました。「離れる自由、とどまる自由」この自由の保障が、広く共通した司牧上の関心事となっているとしています。

これを受け、仙台教区では9月24日(日)、世界難民移住移動者の日にガクタン エドガル司教様とギャリー・ゲストベオ神父様の司式でインターナショナルミサがささげられました。今年は、お互いにコミュニケーションを深める試みで、それぞれの出身国の国旗シールを胸に貼り参加しました。先唱や聖書の朗読、共同祈願、聖歌など各国の言葉で行われました。

(この日の説教は6ページ)

ミサの最後に、司教様をはじめ典礼奉仕者や聖歌の奉仕者、参加した方々の地域の紹介で聖堂は大きな拍手で包まれ、閉祭の歌「あめのきさき」を各国の言葉で歌い盛大に終了しました。



久しぶりの  
交流会で  
信徒の絆が  
ますます  
深まりました

ミサ後は、交流会が行われ、フィリピンチームやベトナムチームによるダンスや歌、韓国チームのウクレレ演奏、ラテンアメリカチームとISJ(多国籍の合唱グループ)による歌が披露され、大いに盛り上りました。コロナ禍のため、3年ぶりの交流会となりましたが、これからも続けていければと願っています。

関 毅 (元寺小路教会)

## 〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉 幼児洗礼式

10月1日、元寺小路教会では、5人の子どもたちの洗礼式が行われました。

ミサの説教で、イグナシオ・マルティネス神父は次のように話されました。「これから、私たちは5人の子どもたちに洗礼を授けます。教会がいくら、この子たちに洗礼を授けたいと思っても、ご両親がお望みにならなければ、授けられません。



洗礼を受けることによって、豊かな家族の一員となるのです。

洗礼を受けることにより、この子たちは神の子どもとなります。自分の力だけで生きるではありません。何があっても、天のお父さんが守ってくださるのです。この小さい子どもたちは、今、私が行っていることは分からぬでしょう。しかし、いつの日か、ご両親がこの洗礼式のことを話してくださったとき、わかるでしょう。信仰の伝達です。

ここで、洗礼を受けても、それが終わりではありません。これからあなたがたの歩みのために、私たちは、あなたがたのためにお祈りをします。

ご両親の皆様、おめでとうございます。この子に一番ふさわしいお父さん、お母さんがあなた方です。神様があなた方を選んで、この子を受けられたのです。あなた方のお子さんですが、神様の子どもです。すべての命の源である方から授かった子どもです。この子たちは、体も心もキリスト者として成長していきます。それを支える務めは大切です。

どんな道を歩むのか分かりません。色々なことがあると思います。神様の支え、導きを願いながら、私を支えてください、という祈りをしなければなりません。社会においても、神様の愛、慈しみを告げ知らせるのです。」

5人の子どもとご両親の紹介、ご両親の意思の確認、ご両親と代父母は子どもに十字架のしるしをした後、諸聖人の恵みを願って連願が唱えられ洗礼水の祝福の後、一人一人の子どもたちに、洗礼が授けられました。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

## 仙台カトリック鶴ヶ谷墓地 共同墓参・野外ミサ



11月3日（金・祝）、カトリック鶴ヶ谷墓地で第4地区の共同墓参・野外ミサが行われました。司式は、俞鍾弼（ユ・チョンピル）神父様、森田直樹神父様、ヴァレラ・ミゲル神父様、小野寺洋一神父様でした。修道者や信徒、合わせて約140人が、爽やかな秋晴れの中、ミサにあずかることができました。共に墓前で祈る恵みに感謝です。久しぶりの再開を喜ぶ笑顔が目をひきました。

担当教会の北仙台、東仙台、西仙台、そして協力してくださった元寺小路教会、墓地委員会の皆様に感謝します。当日の献金は墓地委員会に寄付しました。

上野 隆（西仙台教会）

## 〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉 渡辺徹郎新司祭の初ミサと子どもの祝福式

11月12日の主日のミサは、渡辺徹郎新司祭による、元寺小路教会での初ミサとなりました。



八木山教会で洗礼を受け、元寺小路教会所属の彼は、9月23日東京大司教区の麹町聖イグナチオ教会で、司祭に叙階されたイエズス会の神父様です。来年4月、司祭として小教区に派遣される前の貴重な時間を大勢の信徒と一緒にささげる、うれしい初ミサとなりました。

また、この日は子どもの祝福式も行われました。15人の子どもたちが、新司祭から祝福を受け、記念のメダイを一人一人の首にかけていただきました。



仙台教区出身の司祭として、これから始まる司祭職が豊かなものとなるように、お祈りしたいと思います。 関 肇（元寺小路教会）

### 〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉 4年ぶりの教会バザー

10月15日（日）、コロナ禍のため、しばらくできなかったバザーが、4年ぶりに開催されました。テーマは「交わり・参加・そして宣教」ともに歩む教会。当日は、あいにくの雨模様となりましたが、たくさんの方が集まりました。



9:30のミサ後、イグナシオ・マルティネス神父様のあいさつとお祈りから始まりました。手づくりの会が作った手工芸品や、いろいろなグループの物品販売、ダンスや歌の披露、子どもたちによるbingoゲーム、青年会のパン取りゲームなど、盛りだくさんのプログラムが繰り広げられました。



久しぶりに老若男女、国籍を問わず笑顔があふれる教会が戻ったようで、コミュニケーションが深まった楽しいバザーとなりました。

来年以降も続けていければと思います。

関 肇（元寺小路教会）

## 第5地区より

### 〈中通り北ブロック〉

野田町教会・松木町教会 合同開催  
インターナショナル交流会  
8月10日（木）

フィリピンの方を中心に40人がバーベキューパーティーやゲームを楽しみました。



ニュースペーパーダンスのゲームは、特に盛り上がりいました。



（月刊ふくしまカトリックニュースレター 9月号より）

### 9月10日（日）

ベトナムの方を中心に26人が集まりました。聖堂で自己紹介、歌の練習、お国自慢料理（ベトナム・フィリピン・日本）、ゲームを通して交流しました。



### 〈ベトナムの方から〉

素晴らしい集会に参加させていただきありがとうございます。皆さん優しく、きれいな歌声を耳にして、私たちもその楽しい雰囲気に溶かされるようでした。曲の意味が分からぬとしても大きい声を出して歌いました。ベトナムの料理も含めてたくさんのいろいろな料理をいただきました。ゲームも楽しかったです。この集会を通して他の国の皆さんと仲良くできるし、多文化理解度も高くなります。これからもぜひこのような集会に参加させてほしいです。

（月刊ふくしまカトリックニュースレター 10月号より）

# 東京大司教区に補佐司教任命



## アンドレア・レンボ神父

教皇フランシスコは、9月16日午後7時、東京教区補佐司教にアンドレア・レンボ（Andrea Lembo）神父を任命されました。補佐司教が5年間不在であった東京教区に、12月16日13時に叙階式が行われ誕生する新司教のために祈りましょう。

### 【略歴】

1974年 イタリア生まれ  
2003年 助祭叙階  
2004年 司祭叙階  
カトリック・ミラノ外国宣教会管区長、  
公益財団法人真生会館理事長などを務めた

## 新「ローマ・ミサ典礼書」によるミサ実施に向けて〈その5〉

### 聖体制定句の後の記念唱と

### 奉獻文最後の栄唱

ミサの奉獻文の中にあるパンとぶどう酒の形でご自分からだと血を残されるイエスさまの言葉、すなわち「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだである。」「皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯。あなたがたと多くの人のために流されて、罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血である。」という語句を「聖体制定句」とよびますが、この直後に「信仰の神祕」に続いて唱えられる語句を「記念唱」とよびます。

会衆の応唱が3種類ありますが、皆さまのところではどれを使っておられるでしょうか？この応唱の選択については、ミサの前にどれを

使うか、必ずお知らせをすることが必要です。多くの教会では、一つ目の「主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。再び来られるときまで。」を使われているかもしれません、復活の主に対するこの応唱すべてが唱えられるようになるとよいですね。なお、典礼注記には、「会衆は…はっきりと唱える」と記されています。

また、奉獻文最後の「キリストによって…」の栄唱への会衆の応唱は、「アーメン」だけになりました。奉獻文をしめくくる「アーメン」です。別名、「グレートアーメン」とも呼ばれています。心を込めてはっきりと唱えたい「アーメン」でもあります。

仙台教区典礼担当者 森田 直樹 神父

### 信徒のつぶやき

### 言葉の力

“初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成了った。成了るもので、言によらずに成了たものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らず光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。”

（ヨハネによる福音書1・1～5）

私はカウンセラーとしてさまざまな場所で人々の不安、辛さ、苦しい気持ちを聴くことがあります。悩みの多くは、他者からかけられた心無い言

葉によるものが多いと感じています。自分が疲れたり、苛立ったりしているとつい厳しい言葉を人に投げかけてしまうことがあるようです。自分が意識せずに発した言葉は忘がちですが、受け取った側は大変傷ついていることがあります。心理学者のピアジェという人は、子どもの自己イメージは親からかけられた言葉で作られるといっています。私たちは言葉の大切さを知るものとして、自分の発する言葉に責任をもって、温かい光を注ぐような言葉を使つていただきたいと思います。

平井 美弥（北仙台教会）

# 教区の諸活動

## 2023年第9回「日韓脱核平和巡礼」 仙台オプショナルツアー開催

今年の日本カトリック正義と平和協議会と韓国カトリック司教協議会生態環境委員会共催「日韓脱核平和巡礼」は日本側がホスト国としての開催です。10月13日(金)から17日(火)に「15」の原子力発電所が密集する福井県の若狭湾沿岸への視察・巡礼を終えました。韓国側から追加で福島・宮城の視察希望があり17日(火)から20日(金)まで仙台教区でのオプショナルツアーとして13人の韓国側の参加者をお迎えしました。この企画は仙台教区・カトリック正義と平和仙台協議会・仙台教区で働く司祭・市民グループの協力で進めました。みやぎ脱原発・風の会の須田剛さんは2日間の同行です。車中で宮城の脱原発運動の歩みを説明いただきました。カトリックの取り組みですが快く賛同いただき、全面的に頼らせてもらい本当に助かりました。



仙台オプションは17日、カトリック元寺小路教会大聖堂でガクタン司教主司式の歓迎ミサから始まります。

ときに、イスラエルのガザ攻撃という衝撃的なニュースが飛び込んできました。イグナシオ神父はミサ説教の前に、平和を求める連帯を呼びかけ、さらに3日間の巡礼のため祈りが捧げられました。私も明日からの巡礼ではしっかりと見て、祈り、分かち合い、原発問題とも向き合い平和について考えを深められるよう祈りました。

18日はイグナシオ神父が同行し、福島方面へ貸し切りバスで向かい原町教会で祈り、双葉町東日本大震災・原子力災害伝承館、震災遺構・請戸小学校を見学。双葉駅界隈ではバスを降り、

人の住めない町を見ました。右手に福島第一原発のむき出しの鉄塔が見える請戸の海岸も歩きました。ガイド役として同行した地元の志賀勝明さん(請戸の元漁師)の話に皆が食い入る様に耳を傾け、質問も止まりません。志賀さんは福島原発建設時から反対運動をしています。当時の漁師は皆賛成派でした。一人反対するのは計り知れない孤独感があったことや、今日までの心境も聞いて、その思いが深く胸に突き刺さります。現地に立ち、現在も続いている震災の爪痕など肌で感じる一日となりました。



19日はガクタン司教同行で、石巻・女川方面に出発です。途中から女川在住の阿部美紀子さんが合流し、女川原発PRセンター、小屋取漁港から眺める女川原発見学に同行しました。車中で震災当時の話を聞きながら、車窓から見える景色は当時の状況と重なります。その後、石巻教会を訪問し、カリタスベースへ移動。女川原発再稼働差し止め訴訟原告団・日野正美さんから裁判経過について話を聞き、ここでも質疑応答は活発でした。ゆっくりと分かち合いの時間が持てなかったのは残念で、次回への課題です。夕方仙台に戻り、毎週開催される原発反対のデモに合流。韓国側の参加で普段以上の熱気もあり、韓国の活動状況を知ることもできました。最後の夜は食事会で皆別れを惜しむように会話を尽きませんでした。教会内外の方々と一緒に歩む「シノドス」の旅となり、3日間の充実したオプションを無事に終えられたことを神さまに感謝し再会を願いました。

カトリック正義と平和協議会  
木元 範子(北仙台教会)

# みんなで「ともに」作り上げる NWM in 仙台 『この聖堂が日本の青年であふれる日を待ち望んで』



11月3日(金・祝)から4日にかけて「ネットワーク・ミーティング(以下 NWM)in 仙台」が開催され、全国から約60人の青年や司祭・修道者が会場の元寺小路教会に集いました。NWMとは青年の「情報交換と交流」をモットーに、各教区持ち回りで年2回、開催されている青年向けの集いです。カトリック青年連絡協議会が後援、開催教区の青年が主催する形で行われ、20年以上の歴史を持っています。今回、コロナ禍で縮小しつつあった青年たちの活動も少しずつ以前の活気を取り戻し、仙台教区でのNWM開催のお話をいただきました。そして、記念すべき第45回目を仙台教区にて「初」開催することができました。これまでの開催経験や知識がほとんどない青年たちによる新たな挑戦です。



それも7人の青年で60人規模の集いを企画・運営するというNWM史上、最も少ないスタッフ数だったと思います。それでも挑戦しようとする私たちを青年連絡協議会の方々が企画段階から当日の運営まで、リモートや前泊を通してサポートしてくださいました。

さて、今回のテーマは「ともに」です。シノドスや前回のNWM in 福岡のテーマ「つながり」、WYD Lisbon、東日本大震災の復興支援や感謝などを込めて選びました。企画で大切にしたことは、仙台教区らしさです。せっかく仙台に来てもらうのだから、ぜひこの教区のことを知ってもらいたい。そこで、お弁当やお菓子は教区内の名物を用意し、忘れもしない出来事である東日本大震災について学ぶプログラムなどを準備しました。



備しました。また、「ともに」作り上げるNWMとして、テゼの祈りや東日本大震災の企画では、カリタス南三陸の千葉道生さん、ドリンクコーナーでは心の港など、教区内の諸活動団体にもご協力いただきました。WYDでの体験を分かち合うプログラムでは、参加した仲間たちとの再会や活躍がたくさんあり、とてもうれしかったです。他にもミサや教会の祈り(朝)、クリスマスツリーの工作など本当にさまざまな「ともに〇〇」がある2日間となりました。



一方で、これだけの企画を少ない青年で準備することはとても大変で、心が折れそうになることが何度もありました。それでも私が最後まで頑張ったのは、2019年に初めて参加した東京のNWMでの体験です。日本の教会で奮闘する仲間たちと出会い、交流し、その情熱と絆にふれ「いつか仙台でもできたらいいな、カテドラ



ルの聖堂が若者でいっぱいになつたらいいな。」と憧れを抱きました。今回その願いがかなったことは本当に大きな喜びです。

NWM in 仙台の開催にあたり、会場の元寺小路教会共同体をはじめ仙台教区事務所、心の港、教区内外の修道会など、たくさんの方々が青年たちに協力し、「ともに」歩んでくださいました。また、ポスター等でこの行事を知り、お祈りしてくださった方もいると思います。この場をお借りして、多くのご支援とお祈りに心から感謝いたします。

今後とも教会に集う青年たちのためにお祈りください。また、NWM in 仙台を通してできた青年同士の「つながり」がいつまでも「ともに」に続くように願っています。

NWM in 仙台実行委員会 青年代表  
先崎 まこ (元寺小路教会)

## 訃 報



### ラベ モリス 神父 (ケベック外国宣教会)

長年仙台教区で宣教司牧をされた他、6年間ケベック外国宣教会の管区長として、また会計責任者としてご奉仕されました。

#### 〈略歴〉

1933年 3月27日 カナダ、ケベック州シェーブルック市で誕生

1958年 6月29日 司祭叙階

1959年 9月12日 来日

1959年～2017年まで 約58年間宣教司牧に携わる

青森県：十和田教会、本町教会、黒石教会、五所川原教会、東京都：赤堤教会  
黒石教会と赤堤教会では幼稚園でもお働きになりました。

2023年 11月5日 カナダ、ケベック会本部で帰天 90歳



### スール ウルスラ 小田 さち子 (聖ウルスラ修道会)

#### 〈略歴〉

1924年 5月17日 秋田県生まれ

1946年 12月24日 受洗

1951年 12月8日 入会

1955年 3月25日 初誓願

その後、八戸白菊小学校（のちの八戸ウルスラ学院）の校長として  
初等教育に尽力した。

2023年 11月20日 老衰のため帰天 99歳

# 司 祭 紹 介

## アンリ・バディバンガ・チポタ（淳心会）



- 生年月日  
1975年9月16日
- 出身国  
コンゴ民主共和国
- 助祭叙階  
2008年11月15日  
倉敷教会
- 司祭叙階  
2009年8月23日  
カナンガ大司教区  
(コンゴ)

## 司祭になろうと思った動機は何ですか？

私が司祭になりたかったのは、私の主任司祭に憧れていたからです。コンゴで生まれ育った地域はサレジオ会の宣教地でした。現在サレジオ会の司祭と教区司祭が共に働いていますが、サレジオ会はよく知られています。今の司教様もサレジオ会員です。私は子どもの時、毎週子どもたちのミサ後、子ども一人一人がチケットをもらって、午後教会のホールで映画を見る習慣がありました。私はたまに映画を見たい時兄2人と友達と一緒にカトリック教会に通っていました。

私にとって憧れの神父様はサレジオ会の神父でした。しかし、カナンガに移動して、ある日熱心な宣教師の淳心会の神父様に出会って、その魅力にひかれて淳心会に入る決意をしました。親に伝えた時、少しがっかりしていましたが、「もしそれがあなたの召命なら前に進む。逆だったらいつでも遠慮なく家に戻ってください。」と父は言いました。家族と召命の道で出会ったすべての方々のおかげでここまで進むことができました。

## 司祭・宣教師として、これから何をしていきたいですか？

仙台教区に来てどういうふうに働きたいのでしょうか。私が思っていたのは宣教師としてまず必ず主イエス・キリストをすべての出会う人

に証ししたいということです。その通りになっているでしょうか。しかし、今は何よりも主イエス・キリストと共に過ごすことを一番大切にしたいと思います。一緒に働いている司祭たちとシスターたちと信徒の皆様を通して主イエス・キリストの姿を見いだすことと主イエス・キリストと共に過ごすこと。ですから八戸市の寒さはとても厳しいと聞きましたがあまり心配しません。なぜなら、一人ではなく約束された国に向かって、共に信仰の道を歩んでいる仙台教区の司教様と司祭たち、シスターたちと信徒の皆様の心の温もりの中で安心して暮らしていくことが、できると思うからです。

## 他に何か言いたいこと？

私は13歳で洗礼の恵みを受けました。洗礼を受ける前に母はプロテスタントの信者で私と妹と2人の弟は一緒にプロテスタント教会に通っていました。当時父はカトリック信者で母はプロテスタントの信者でした。私たち子どもにはまだ洗礼を受けさせず、カトリック教またはプロテスタント教を選ぶ自由が両親から与えられていきました。ですから私は13歳で洗礼を受けました。妹と一緒に洗礼と初聖体を受けた時母はカトリックに改宗しました。その後、弟も受洗し、一番下の弟は幼児洗礼でした。兄2人は既にカトリック教会の洗礼を受けていたので、カトリック教会に通っていました。父なる神はマタイ20.1-16(ブドウ園のたとえ)にあるとおりそれぞれの時間に私たちをご自分の子とするために呼びかけておられます。ある人は朝(幼児洗礼)、ある人は昼(成人洗礼)、ある人は午後(大人の洗礼)、ある人は夕方(人生の終わりのころ、または臨終洗礼)です。父なる神の子になることは人それぞれ時間が違います。

主よ あなたの慈しみが、  
われらの上にあるように  
主を待ち望むわれらの上に  
(詩編 33・22)

## 編集後記

クリスマス号が完成しました。皆様に喜んで読んでいただけたらスタッフ一同、心を合わせて編集いたしました。仙台教区の皆様のご協力によってできあがったものです。感想など、率直に教えてください。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

sendaikyoukuho@gmail.com 次号発行予定日：4月28日(日) 原稿締め切り：3月11日(月)